

指揮とお話◎

アンドレア・バッティスト

Andrea Battistoni, conduct & talk

コンサートマスター©近藤 薫 Kaoru Kondo, concertmaster

ヴェルディ: 歌劇『ナブッコ』序曲(約8分) Giuseppe Verdi: "Nabucco" Overture

マスカーニ: 『カヴァレリア・ルスティカーナ』より間奏曲(約3分)

Pietro Mascagni: Intermezzo from "Cavalleria Rusticana"

ロッシーニ: 歌劇『ウィリアム・テル』序曲(約12分)

Gioacchino Rossini: "William Tell" Overture

休憩 Intermission (約15分) —

ベートーヴェン: 交響曲第5番 ハ短調 作品67 (運命) より第1楽章(約8分) Ludwig van Beethoven: 1st Movement from Symphony No. 5 in C minor, op. 67

ベートーヴェン: 交響曲第6番 ヘ長調 作品68 [田園]より第1楽章(約10分) Ludwig van Beethoven: 1st Movement from Symphony No. 6 in F major, op. 68 "Pastrale"

ベートーヴェン: 交響曲第7番 イ長調 作品92 より第4楽章(約8分) Ludwig van Beethoven: 4th Movement from Symphony No. 7 in A major, op. 92

9/4(日) 14:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

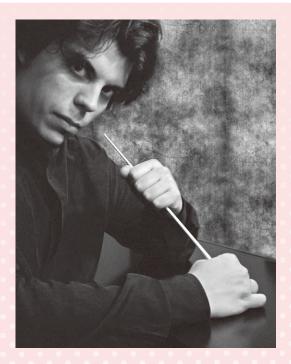
Sun. September 4, 2016, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall



主催:公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団/助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra / Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan 協賛:三菱UFJ二コス株式会社 / Sponsored by Mitsubishi UFJ NICOS Co., Ltd.



解説◎柴田 克彦



指揮とお話:アンドレア・バッティストーニ

Andrea Battistoni, conduct & talk

1987年ヴェローナ生まれ。アンドレア・バッティストーニは、国際的に頭角を表している若き才能であり、同世代の最も重要な指揮者の一人と評されている。2013年1月よりジェノヴァ・カルロ・フェリーチェ歌劇場の首席客演指揮者に、年間にオペラ2作品、交響曲公演2プログラムを指揮する3年契約で就任。2015年、東京フィルハーモニー交響楽団首席客演指揮者に指名された。

東京では『ナブッコ』(二期会)等のオペラ、ローマ三部作等の交響曲プログラムで東京フィルを指揮し、そのカリスマと繊細な音楽性でセンセーションを巻き起こした。2015年東京フィルとのコンサート形式『トゥーランドット』では批評家、聴衆両者に対し音楽界を牽引するスターとしての評価を確立。東京フィルとは日本コロムビア株式会社より4枚のCDを発表している。

注目すべきキャリアとしては、スカラ座、トリノ・レージョ劇場、カルロ・フェリーチェ劇場、ヴェニス・フェニーチェ劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、スウェーデン王立歌劇場、アレーナ・ディ・ヴェローナ等と共に、東京フィル、スカラ・フィル、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、イスラエル・フィル、ベルリン・ドイツ・オペラ等世界的に最も著名なオーケストラ等とも多くの共演を重ねている。

プログラム・ノート

イタリア・オペラとベートーヴェン

今回の「休日の午後のコンサート」は、首席客演指揮者バッティストーニがおくる「イタリア・オペラとベートーヴェン」。お国のイタリア物を得意とするだけでなく、昨年暮には東京フィルのベートーヴェン「第九」で清新極まりない演奏を聴かせた彼が、両者の関係を紐解きます。

前半は、イタリア・オペラの管弦楽曲。マエストロと東京フィルの出会い(2012年二期会での上演)のオペラ『ナブッコ』の序曲をはじめ、メロディアスかつシンフォニックな音楽が披露されます。後半は、ベートーヴェンの交響曲のハイライト。ここでは、有名交響曲の代表的な楽章を続けて聴くという、生では意外に稀な体験を得ることができます。

バッティストーニは、ある記事で「ベートーヴェンの交響曲はエネルギッシュで、カンタービレにあふれているから、イタリア人指揮者にとっても演奏するのがとても自然なのです」と語り、筆者のインタビューでは、「東京フィルはイタリアの音を出せるオーケストラ」、「オペラをよく知る同楽団は、シンフォニーにおいても、音でストーリーを描き、ドラマを語ることができます」と話していました。今回はそれらの一端が示されることになります。

ベートーヴェンとロッシーニ

「イタリア・オペラとベートーヴェン」と聞いて思い出されるのは、ベートーヴェンとロッシー二の邂逅シーンです。1822年春、当時30歳のロッシー二はウィーンを訪れ、51歳の巨匠と面会しました。その際ベートーヴェンは、「『セビリャの理髪師』は素晴らしい。イタリア・オペラが存続する限り上演されるでしょう。でもあなたはオペラ・ブッファ(喜劇的なオペラ)以外には手を出さないように」と忠告



しました。これは、ベートーヴェンの慧眼を物語ると同時に、ウィー ンを席巻するロッシー二人気への妬みとして語られる、有名なエピ ソードです。

実はこの話には続きがあります。ベートーヴェンは、ロッシー二のオ ペラ・セリア(悲劇的なオペラ)や、他の複数の作曲家の例を出して、 シリアスなイタリア音楽を否定しながら、ブッファでは彼らに敵わない 旨を述べています。つまり彼はイタリア音楽を熟知していました。

当時のウィーンは、皇帝の趣味もあって、宮廷楽長サリエリをは じめとするイタリア勢が中心。1792年ウィーンに出てきたベートー ヴェンも、1799~1801年頃、サリエリにイタリア語歌曲を学びま した。ベートーヴェンはその直後にイタリア語のアリアや重唱曲を 集中的に作曲していますし、1801年に書かれたヴァイオリン・ソナタ 『春』の流麗な旋律は、イタリア音楽の影響を大いに感じさせます。

そもそもベートーヴェンが心血を注いだ交響曲の有力な母体の 1つが、「シンフォニア」と呼ばれた急ー緩ー急の構成によるイタリ ア・オペラの序曲です。つまり現在コンサートの核を成す交響曲も、 イタリア・オペラ抜きには語れないといえるでしょう。

巨匠ヴェルディの最初の成功作『ナブッコ』



(1813-1901)

幕開けは、イタリア・ロマン派オペラ最大の巨匠ジュゼッペ・ヴェ ルディ(1813-1901)の歌劇「ナブッコ」序曲。「ナブッコ」(1842年初 演。全4幕)は、妻子が亡くなり、前作も失敗に終わって、心身共に どん底のヴェルディを蘇生させた、3作目にして初の成功作です。 紀元前6世紀、古代バビロニア王ナブッコと2人の娘やヘブライ人 たちが繰り広げる、旧約聖書に基づく物語。ヘブライ人解放という テーマや情熱的な音楽が、当時オーストリアの支配下にあったイタ リア国民を鼓舞し、中でも第3幕の合唱曲「行け、わが思いよ、金 色の翼に乗って」は、第2の国歌的な愛唱歌となりました。

ヴェルディの序曲は、楽譜に「シンフォニア」と記されています。こ れは前記の伝統に則ったもの。曲は、本編の旋律を用いた劇的な 音楽で、やはリシンフォニックなテイストを有しています。金管楽器 の和音に始まる遅い序奏から、アレグロの主部へ移り、戦闘シーン から採られた緊迫感漂う主題を中心に進行。中間部では、「行け、 わが思いよ~1の旋律が流麗に奏され、快速調に戻った後、激しく 高揚していきます。

マスカーニを世界に知らしめた 『カヴァレリア・ルスティカーナ』

次はとても美しい音楽。現実的な事件を描いた「ヴェリズモ・オペ ラ|の開拓者の一人、ピエトロ・マスカーニ(1863-1945)の歌劇「カ ヴァレリア・ルスティカーナ』より間奏曲です。田舎の音楽教師だっ た20代半ばのマスカーニは、ローマの楽譜商ソンツォーニョが募 集した1幕物オペラの懸賞で1等に入選。彼の名は一躍世界に広ま りました。その受賞作が1890年に初演された本作。タイトルは「田 舎の騎士道」を意味しています。シチリア島を舞台にした物語は、 4人の男女の恋と嫉妬がもたらす悲劇。単独演奏の機会が多い間 奏曲(これも楽譜には「交響的間奏曲」と記されています)は、物語 後半の教会のミサの最中に演奏される清澄な音楽で、舞台を鎮め ながら転換する役目を果たしています。曲は、ヴァイオリンの清らか な旋律で始まり、哀感の中に力を秘めた音楽が展開後、静かに終 わります。この曲は、後に歌詞が付されて「マスカーニのアヴェ・マ リアーの名でも知られるようになりました。

ロッシー二最後のオペラ『ウィリアム・テル』

前半最後は、イタリア初期ロマン派オペラの大家ジョアッキー ノ・ロッシーニ(1792-1868)の歌劇「ウィリアム・テル」序曲。 ロッシー 二は、37歳時の本作で40本近いオペラの創作を終え、残る約40 年の人生は、宗教曲や小品を作曲し、料理等を楽しみながら悠々 自適で過ごしました。パリで本作が初演された1829年は、ベー トーヴェンの死の2年後。ですから両者の全盛期はほとんど重なっ ています。物語は、ウィリアム・テルを中心に、スイスの独立を勝ち 取る勇敢な人々を描いた、シラー原作の英雄劇。主人公が息子の 頭に乗せたリンゴを矢で射る場面で有名なお話です。ただし、長大



ピエトロ・マスカーニ (1863-1945)



ジョアッキーノ・ロッシーニ (1792-1868)

な全曲はあまり上演されず、序曲だけが断然の支持を得ています。 曲は、物語に沿った4つの部分から成る小交響曲のような構成。 第1部「夜明け」(タイトルは通称)は、独奏から五重奏に発展する チェロを中心に、スイスの夜明けが描かれます。第2部「嵐」は、 全楽器での激しい描写。フルートの小鳥のさえずりを経て、第3部 「静けさ」へ移り、イングリッシュ・ホルンが美しい牧歌を奏でます。 第4部「スイス軍の行進」は、ファンファーレに始まる歯切れよい行 進曲。畳み掛けるように高揚する、おなじみの音楽です。



ベートーヴェン (1803年頃)

ベートーヴェンの"傑作の森"、3つの交響曲

後半は、ドイツのボンに生まれたウィーン古典派の巨匠ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)の交響曲から。ベートーヴェンは、主に演奏会の幕開けやフィナーレ用の"機会音楽"だった交響曲を、作曲家の究極の自己表現たる"芸術作品"、すなわち"勝負曲"に変えました。そして1曲ごとに新機軸を盛り込んだ渾身の交響曲を9曲残し、後世のあらゆる作曲家の巨大な指標となりました。今回は、その中から「傑作の森」と呼ばれる中期の代表作が披露されます。

まずは、インパクトのある出だしがクラシック音楽の代名詞にもなっている交響曲第5番『運命』の第1楽章。第5番は、対照的な曲調の第6番『田園』と並行して作曲され、1808年12月の自主演奏会で同時に初演されました。ちなみに『運命』のタイトルは、「『運命はこのようにして扉を叩く』とベートーヴェンが語った」という弟子シンドラーが伝える逸話に由来していますが、彼の伝える話は捏造が多く、これも信憑性は低いとされています。

この曲は、第3&第4楽章の連結、交響曲史上初となるピッコロ、トロンボーン等の使用(第4楽章のみ)など、独創性を満載した作品です。中でもこの第1楽章(アレグロ・コン・ブリオ)は、「ジャジャジャ・ジャーン」の4音=「運命動機」の積み重ねだけでほぼ全体が構築された、とりわけ革新的な音楽。それゆえに唯一流れを断ち切るオーボエのソロが効果的です。

代わって交響曲第6番『田園』の第1楽章。本作は、第5番と対照

される牧歌的な交響曲。自然を愛したベートーヴェンお気に入りのハイリゲンシュタット(1802年の遺書で有名な、ウィーン郊外の土地)で主に作曲されており、当地の風物を反映しているといわれています。『運命』と違ってタイトルは本人の命名。ただ彼自身は「描写というよりもむしろ感情の表現」と語っています。

本作もまた、5楽章構成や第3~5楽章の連結など、斬新な点を 有していますが、何と言っても、内容を示す具体的な言葉が各楽章 に記された「標題交響曲」の先駆けである点が大きな特徴。この曲 の在り方は、ベルリオーズ、リストをはじめとするロマン派の交響曲 や交響詩に多大な影響を与えました。

第1楽章(アレグロ・マ・ノン・トロッポ)は「田舎に着いたときの晴々とした気分の目ざめ」。のんびりとした冒頭主題を中心に進行し、流れるような第2主題が挟まれる、まさに田園的な音楽です。ただ、冒頭の主題提示後のフェルマータ(自由に伸ばす)や、同じ動きの繰り返しなど、第5番との共通性も有しているのが面白いところ。

締めくくりは、交響曲第7番の第4楽章。第5番&第6番から約3年、健康面の不安や失恋が重なっていたベートーヴェンは、1811年夏、ボヘミアの温泉地に出かけて気力を回復し、新たな交響曲に着手します。1812年5月に本作をほぼ完成。翌年初頭に修正されました。公開初演は1813年12月の「戦争傷病兵のための慈善コンサート」。ナポレオン軍に対する戦勝ムードの中開催された同公演は、受け狙いの「戦争交響曲『ウェリントンの勝利』」も同時初演された、いわばお祭り騒ぎのイベントです。明快でビートの効いた第7番も大成功を収め、生前における最大のヒット交響曲となりました。

ベートーヴェンは、ここで"リズムを徹底して強調する"という新機軸を打ち出します。これをワーグナーは「舞踏の神化」と形容しました。しかもハイドンやモーツァルトの交響曲と変わらない編成によってもたらされる迫力と高揚感は、驚きというほかありません。

第4楽章(アレグロ・コン・ブリオ)は、冒頭の「タンタタタン」など 複数のリズム動機をもとに突き進む、エキサイティングなフィナー レ。終盤のバッソ・オスティナート(低音による同一音型の反復)が、 よりいっそうの高揚感をもたらします。

Follow up

イタリア音楽と ベートーヴェンの架け橋、サリエリ

イタリア音楽とベートーヴェンを繋ぐ重要な人物が、アントニオ・サリエリ(1750-1825)です。彼は、映画「アマデウス」等でモーツァルトの毒殺者扱いされていますが、当時は最高クラスの大音楽家でした。イタリアのレニャーゴに生まれ、有力音楽家ガスマンに認められてウィーンに移住。1788年宮廷楽長に任命され、36年間その地位にありました。40ものオペラをはじめ作品も多数。ミラノ・スカラ座の杮落としも彼のオペラで行われています。弟子は、シューベルト、チェルニー、フンメル、リスト……などビッグネーム揃い。さらにはモーツァルトの息子の指導もしました。なおベートーヴェンにはイタリア歌曲を教え、また交響曲第7番と同時に行われた『ウェリントンの勝利』の初演では、砲撃を模する太鼓隊のリード役を務めてもいます。

ちなみにモーツァルト毒殺説に根拠はありませんが、存命中から広まっていたのは、ベートーヴェンの筆談帳に再三登場することからもわかります。本人も噂に心を痛め、弟子に「事実無根で、悪意ある中傷。それを世間に伝えて欲しい」と言っていたとか。まあ人間のゴシップ嗜好が風説を後押ししたといえなくもありません。



アントニオ・サリエリ (1750-1825)



サリエリとモーツァルトの関係が描かれた映画「アマデウス」(1984年)

しばた・かつひこ (音楽ライター)/音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。コンサートのプログラム、宣伝媒体、CD、雑誌等の原稿執筆およびプログラム等の編集業務のほか、「ラ・フォル・ジュルネ」での講演や一般の講座も行うなど、クラシック音楽を中心に幅広く活動中。